

町史のひとこま

(第七回)

佐谷の太郎正月

「うちあたりで太郎正月をやりよつたですやな」——ちらつと聞きこんだ「太郎正月」の行事を取材に、佐谷の合屋忠三郎さんを訪ねてみた。合屋さんは明治二十五年のお生まれ、今年八十九歳になる。まだまだお元気である。

◇ ◇



合屋 忠三郎さん

太郎正月の話が出たが、稲永氏は自分の家でも二月一日に正月行事をしていると語られたとのこと。しかし、これが太郎正月と同じものかどうか

行事である。一月十一日（古くは二十日）の鏡開きの行事とよく似ているが、「太郎朔」と「太郎正月」はもとと同じ行事だったのではあるまいか。それが二つの部落で何百年も伝わるうちに、かたちを変えていったものと考えられる。

め見つかったことになっており黒殿様はカゼを治すという信仰がある。このお祭りが毎年十二月二十九日、少年だけがこもりをして姫の霊をなぐさめている。年末に落城したらしい。もう一つは、若杉の「金のにわとり」の伝説。若杉に殿の屋敷という地名がある。こはそのむかし、高鳥居様と呼ばれた杉家の人々が住まっていた所と言われている。この土地で、十二月三十一日の大晦日に、金の瑞鶏が鳴くというのである。高鳥居落城の際、城の人々は屋敷の井戸に財宝を投げこみ大岩でふたをして逃げていった。井戸に閉じこめられた純金の「にわとり」が大晦日に鳴くという話である。これも年末の落城話だ。

と同じものかどうかはわからない。乙植木の稲永姓の人にたずねてみたが、そういうものの記憶はないという返事であった。合屋姓は町内では佐谷と乙植木に多いが、乙植木の合屋姓の人たちにも「太郎正月」の行事はあるのだろうか。ごぞんじの方におしえていただきたいものである。私が知っているのは篠栗町の若杉部落の例である。むかし、若杉山のこちら側を左谷、むこう側を右谷と呼んでいた。左谷が今の佐谷、右谷が今の若杉旧勢門村である。この若杉は合屋姓の多い土地で、ここにも「太郎朔」と呼ぶ行事がある。

太郎朔は、正月に神棚にあげた鏡もちを残しておいて、二月一日（朔は一日のこと）に家族そろって鏡もちをわけて食べるカゼをひいていてセキをしたた

太郎正月は毎年二月一日に正月を祝う行事です。太郎正月をするのは、佐谷でも合屋姓の家だけでしたな。新暦と旧暦の正月もありますから、正月を三回する時もありました。旧暦が二月一日に近い年は二つを兼ねてします。私がおの心ついた頃は合屋姓のどの家でも太郎正月をしていました。戦後もしばらくは続いていましたがね。

ます。それから、家族みんなでおぞうに食べるんですね。それが、かならず二月一日に正月行事をするわけで、太郎正月と呼んでいました。

守母神社の伝説にもあるように、合屋家は高鳥居城主杉家と密接な関係があったらしい。各地に伝わる話の中にも年末の落城を伝えるものが二つあって、太郎正月との関連が注目される。

説と関係があると言えるかもしれない。（お正月にふさわしい話題をとりあげてみました。新原の米騒動は次号にまわします）

太郎正月といっても、特別なことをするわけではありません。モチをつけて、お神様にそなえ

母から聞いていたのは、太郎という人が貧乏で正月をしきらんかった。それで月遅れの二月一日にした。その頃をしのんで太郎正月をするようになったというのでした。（合屋忠三郎さんの話）

合屋さんが、かつて稲永卯十郎氏（初代町長）と雑談の折、

（町誌編集委員会事務局 石瀧）

